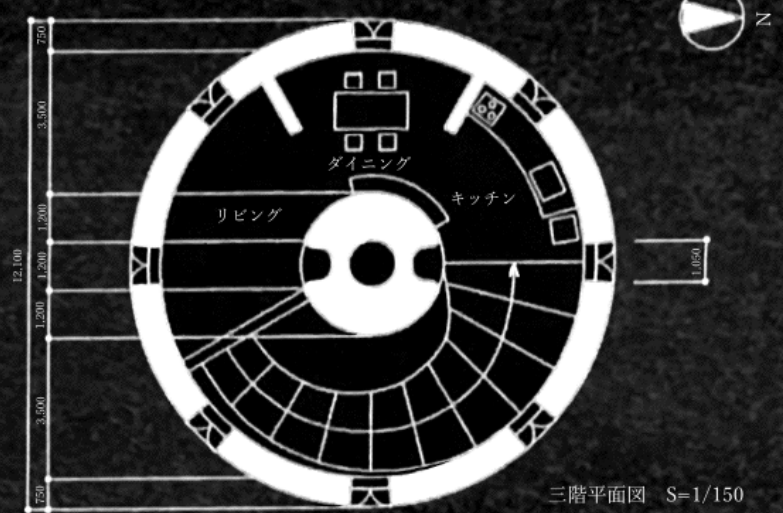
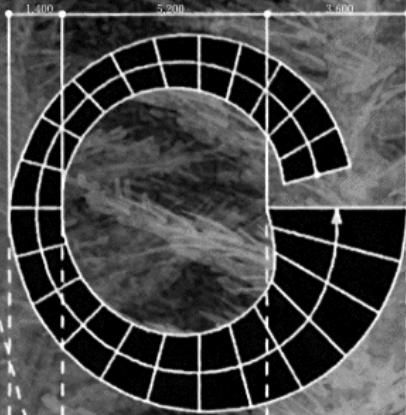


# 蟻塚の地

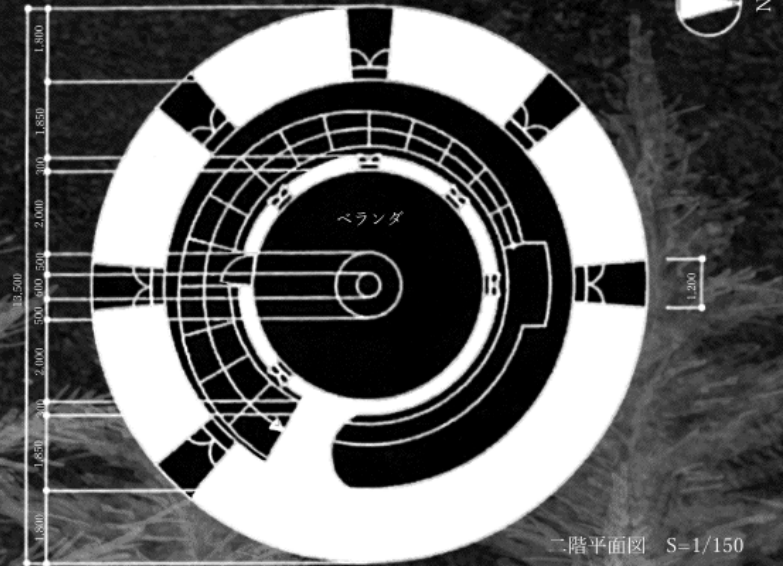
ぎてつのもち

敷地配置図 S=1/1500

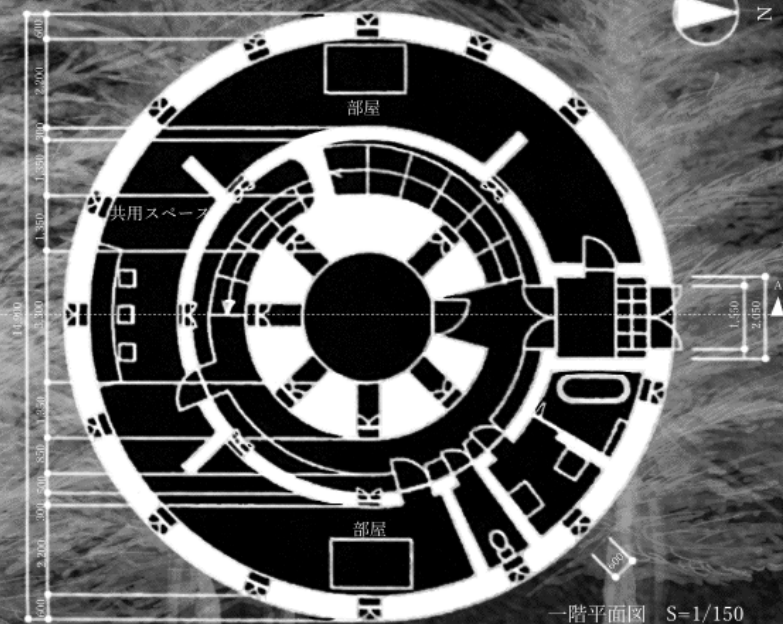
地上階段形状 S=1/150



三階平面図 S=1/150



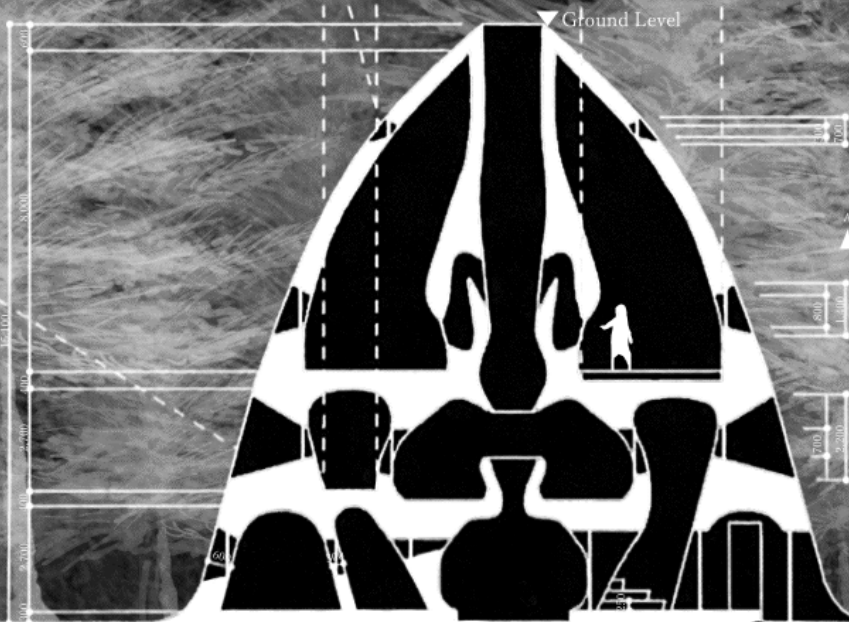
二階平面図 S=1/150



一階平面図 S=1/150

A-A'断面図 S=1/150

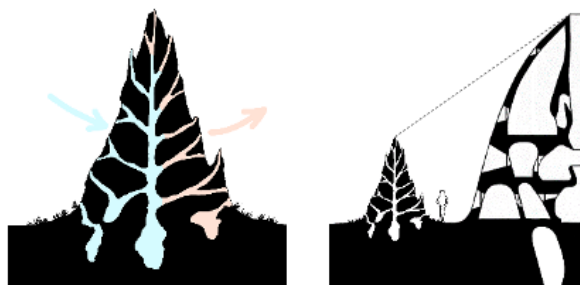
▼Ground Level



## 1. 蟻塚と建築

ある種類のシロアリは、その土地の土と排泄物で巣を建築する。これを蟻塚(ぎてつ)という。蟻塚は空気孔から内部の温度調節や空気の交換ができるようになっている。

蟻塚を人間が住める大きさに再現することで、私たちにとっての建築になる。この建築は土地と一体化することで「蟻塚の地」になる。

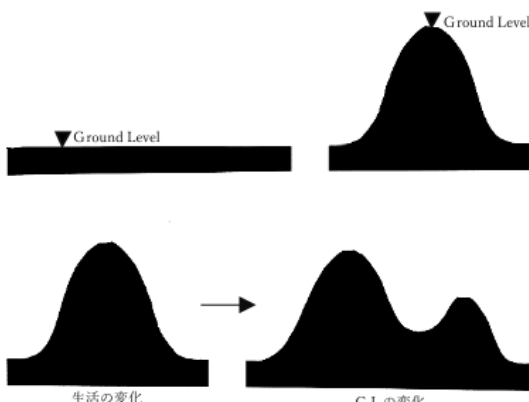


## 2. グラウンドレベルの建築

地面から隆起するように一体化して造られる構造は、「グラウンドレベルの建築」と言える。

また本来の蟻塚は絶えず変化している。気候、風向き、温度に対応してシロアリたちが蟻塚を修復しているためである。これは代謝とも考えることができる。蟻塚もシロアリと共に生きていくのだ。

私たちの生活も社会情勢によってさまざまな変化があるが、それに合わせて住宅の形を変えられればどれほど良いだろうか。「蟻塚の地」も変化する。時を経て形を変え、大きくもなれば小さくもなる。私たちは蟻塚の地、つまりグラウンドレベルと共に生きていくのである。



## 3. 敷地の詳細

長野県東信地方の軽井沢にある山中が敷地である。標高は1000メートル前後であり、冷涼な気候のため夏には避暑地となる。

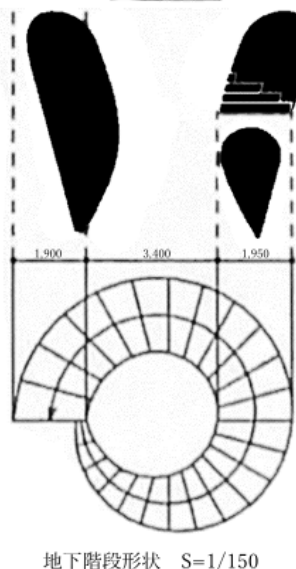
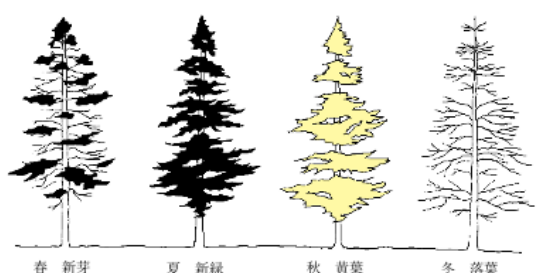
一帯は多孔質火山性の土壌で構成されるため水はけが良い。また軽井沢では一年のうち1/3は霧に包まれ、幻想的な風景が作り出される。



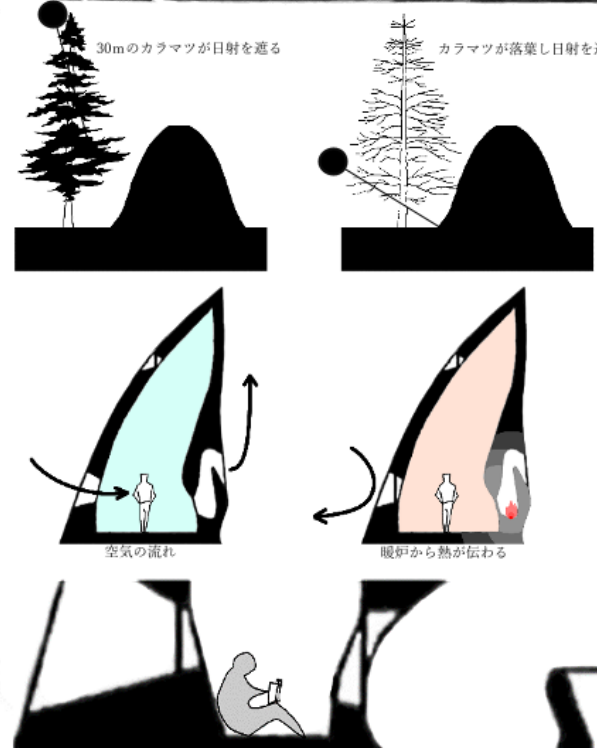
## 4. カラマツ

軽井沢ではほとんどの場所が林でおおわれており、そのほとんどがカラマツである。日本産針葉樹の中で唯一の落葉樹であり、樹高は20-30メートルに達する高木である。

カラマツは春に新芽を出し、夏には新緑が成長する。秋になると黄葉になり、冬に落葉する。



地下階段形状 S=1/150



## 5. 土壁の熱容量

土でできた壁は熱容量が大きい。冬場はカラマツが落葉するため日光があたり、昼間に蓄えた熱で建物の温度を一定に保つ。

また夏場は避暑地であることに加え、カラマツが日光を遮り、建物の温度上昇を防ぐことができる。

## 6. 環境に適応する

蟻塚と同じく、夏場では開口部から温度調節や空気の交換を行うことができる。開口部を窓や扉で閉じて空気の流れを調整することもできる。

軽井沢の冬は厳しい寒さになるため、土壁の蓄熱に加えて暖炉を設置した。それを構造の一部に繋げることで暖炉から建物全体に熱が伝わる。

## 7. 大きい螺旋階段

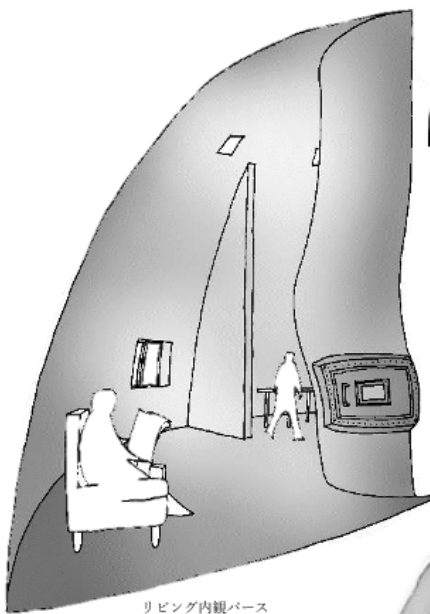
螺旋階段は踏面を大きくすることで居住性を持たせた。場所によって明るさや天井高が変化することで多様な空間を演出させた。

螺旋階段の外側の壁には角度をつけており、背もたれとして機能するよう設計した。

## 8. 「蟻塚の地」の可能性

シロアリは私たちに比べて小さい生物である。しかしそんなシロアリの蟻塚は、人よりも遙かに大きい数メートルの高さに達するものがある。

私たちの「蟻塚の地」とは個人の住宅にはとどまらず、都市をも形成する建築になり得るかもしれない。人々の生活をグラウンドレベルで支える建築、これも「グラウンドレベルの建築」である。



リビング内観パース

